

# マルクス主義 — 起源とゆくえ — \*

小幡道昭

2016年10月5日

## 1 マルクス経済学とマルクス主義

■「マルクス経済学」とは 私事から話を始めるのは趣味ではないのですが、私は今年3月末日に退職するまで、三十四年ほど大学教師を続けてきました。担当科目は、経済学部では「経済原論」、法学部では「経済学原理」とよばれていましたが、要するに「マルクス経済学」です。「経済原論」といっても、現在主流の「ミクロ理論」や「マクロ理論」まですべて包含する基礎理論というわけではありません。先日、とある研究会で、かつて同じ大学院で学び、その後地方の大学で同じ科目をずっと担当してきた友人が、自分の経済学はこうしたものも呑み込む「懐の深い」原論だ、だから、部分的にはミクロ理論の「限界」という概念も取り込んでやってゆくのだ、と公衆の面前で語るのをきいて、ずいぶん違う道を歩んできたのだとはじめは驚きつつも、それはある面で、彼の先生がそうだったので、それをそのまま引きずっていられる環境にいたのだと、どこか妙に腑に落ちるところがあり異を唱える気がしませんでした。

というわけで、開口一番、私はいつも講義の最初に、これからやるのは「マルクス経済学」だよ、とまず告げてきたきました。自分の教科書も「本書は、マルクス経済学による経済原論のテキストである」という一文ではじめました。ハッキリさせておきたかったのは、同時並行で開講されている「ミクロ経済学」や「マクロ経済学」とは異なる、独立した別個の「理論」があるのだという点です。価格とか利子とか、あるいは労働市場とか景気循環とか、同じような用語がでてくるし、方法論的にも、前提を明確にして論理的推論を軸にする「理論」的手法によっているためか、別個の理論だという点が伝わらず、私の定期試験に教えた覚えのないミクロ理論で解答してくる学生がはじめのうちは散見されたのです。こうした混乱を避けるには、「マルクス経済学」という「ラベル」を貼っておくに如くなしと考えたままで、この呼び名にさしあたりそれ以上の思い入れはありません。

問題は中味のほうで、その独立性をいかにインプリメントするのか、これが実質的には重要なのです。結局のところ、ふり返ってみると長い歲月、この意味で「頑健なマルクス経済学」を組み立てることに専念してきたこととなります。そんな狭い見を捨て、もっと現実に立ち向かうべきだ、とアドバイスしてくれた友人も少なくなかったのですが、し

---

\* 世界システム研究会（東京経済大学）

かし、この組み立て作業は、いわば家業として、うっちゃっておくわけにはいかない状況にあったのです。正直に申せば、純粋な理論という立場でみたとき、マイクロ理論（プラスマクロ理論）と肩を並べうる別個の理論だと胸を張って言いきる自信が、はじめのうちはあまりなかったのですが、一五年くらい講義をして、二千年代にはいったころには話す内容も固まり、自分のやっている原理論は、支配的なマイクロ・マクロ理論とは異なる独自の理論だという強い確信をもつようになりました。こうして、学生向けの教科書を書きあげ、またそのベースとなる論文を発表してきました。まだわからないことも少なくないのですが、向こう岸の経済理論との基本的な違いはハッキリしたと思い、大学をやめるにあたって「マルクス経済学を組み立てる」という論文でこの違いをコンパクトにまとめてみました。

本日もこの続きを話そうかと思っていたのですが、少し専門的な話になりますし、「マルクス経済学の原理論」の細目より、その存在意義がわかればよい、というのが大方の意見でしょう。そこで、今回はちょっと論題を替えることにしたのですが、ただ、今日の本題に深く関わるので、話の序でに「マルクス経済学を組み立てる」のエッセンスを紹介しておきます。

■マイクロ経済学との対峙 ところで欧米の大学では、まず「マイクロ理論」と「マクロ理論」を教え、そのあとさまざまな応用経済学に進んでゆくのが定石のようです。こうした教育システムで学位をとってきた学部スタッフからは、「経済原論」はどうしようもない違和感があったのでしょうか、陰に陽に経済学部に進学しようという学生にいきなりマルクス経済学の原理論を教えるのはやめたほうがよい、基礎理論が二つあるなんていうのは混乱のもとだ、駒場ではなく本郷で好きなだけ教えればよいではないか、という圧力がかかってきました。ただ、マルクス経済学の原理論を研究してきた立場からみると、経済学には単一の一般理論があり、それがマイクロ理論とマクロ理論だというのは、ロジカルに納得できるものではないのです。こちらからみると、そもそもマイクロ理論とマクロ理論が整合性をもっているのか、それが怪しい。もし両者が統合されているのであれば、「経済原論」という講義名をお譲りしてもかまわないのですが、マイクロの価格決定理論がマクロ的集計の基礎になっていない。市場一般を扱うマイクロ経済学の中心課題だろうと思って、貨幣をどう説明するのですかとたずねると、それはマクロの問題だといい、マクロ理論のひとに物価の変動は諸価格の加重平均ですが、それはどう計算するのですかとときくとその基礎がハッキリしません。総需要と総供給できまるというのですが、総需要も総供給もマイクロ理論ではお目にかかったことのない話です。

マルクス経済学のサイドからみると、向こう岸の経済学はマイクロ理論 プラス マクロ理論のかたちになっていますが、基礎はマイクロ理論の一般均衡論であるのがわかります。どだい経済理論のコアは、競争的な市場における価格現象を説明することであり、この価格理論のうえに社会的生産物の集計量の理論も成立します。そして、いま述べたように、このマイクロ理論とマクロ理論が整合的につながっていないところに主流派の最大の難点があるのだと思います。もちろん、一般均衡論による価格理論のうえに、マクロ理論を統合しようという試みはずっと続けられているようですが、それはおそらく原理的に無理でしょ

う。これに対して、19世紀にイギリス古典派経済学、とりわけリカードの原理では、投下労働価値説による商品価値の決定原理は、そのまま労働時間で集計された社会的生産物の分配と蓄積の理論につながっているわけであり、ミクロとマクロといった分離はありません。ただ、この投下労働価値説が価格理論として正しいかどうかは別問題で、かつてはこの点においてマルクスの『資本論』には大きな前進があるとされてきたのです。価値論の内容にはこれ以上立ち回りますが、次の点は指摘しておきます。それはマルクス経済学の系譜に関わる問題です。通説的には、古典派とくにリカードの原理から『資本論』に至る労働価値説を深化する流れと、これに対して一九世紀末に限界原理を重視し、古典派価値論を否定するかたちで台頭した流れという二大潮流を考え、前者をマルクス経済学、後者を近代経済学とよぶ、これが私の学部生だったころには通例でした。しかし、経済理論の世界をさまよっているうちに、どうも「古典派≒マルクス経済学」対「ミクロの均衡価格論+不完全雇用のマクロ理論」というのは、どうも違うのではないか、と思うようになったのです。

■「需要供給の法則」批判 ここ一五年くらい、こうした疑問に決着をつけようとあれこれ考えるうちに、自分でも少し妙な気がする結論に到達しました。「需要供給の法則」を受け入れるか否か、けっきょくこれが、私の考えるマルクス経済学を他から隔てる分岐線なのだ、という結論です。需要が供給を上まわれば市場価格はあがる、逆なら逆になる、というのは、近代経済学でもマルクス経済学でも同じように受け入れてきた「経済学の常識」なのかもしれません。アダム・スミスはこの需給法則の意義を「神の見えざる手」の比喩で説き、リカードも投下労働価値説によって、日々変動する市場価格の重心としての自然価格の存在を説明します。そして『資本論』もまた、価格の無規律的な変動は価値形態の欠陥をなすのではなく、資本主義的な社会的再生産の編成にむしろ不可欠なのだと強調しているのです（『資本論』第1巻 Werke 版 S.117）。そればかりではありません。あらためて向こう岸の新古典派ミクロ理論をみても、交換比率のテンタティブな変更を通じて一般均衡価格が成立するというかたちでこの法則を重視しています。たしかに、絶えざる変動を重視するか、それを摩擦として均衡条件を重視するか、両岸で違いがあるといえはありますが、それでもやはり「需要供給の法則」は基本中の基本なのです。

ところが、『資本論』の場合、労働市場に目を転じると事情は違ってきます。そこでは「需要供給の法則」は否定されているようにみえます。「産業予備軍の累積」というのは、「需要供給の法則」と食い違っています。たしかに『資本論』でも、貨幣賃金率は好況期に上昇し不況期に下落すると説いているところもあります。だから、労働力商品の価格である賃金はその価値から離れ上昇下落するが、景気循環を通じて一定の重心に引きつけられる、その点で一般商品と基本的に変わらないのだ、といえそうに思えるかもしれませんが、厳密に考えるとこれは誤った類推です。ちゃんと論証するにはそれなりの手続きが必要で、今日はやめとしますが、こうした作業にずいぶん時間を費やしてきたのです。いずれにせよ、『資本論』の労働市場は、産業予備軍が常時存在しながら、労働力は価値どおりに売買されるというかたちになっており、その点でリカードなどの古典派的な労働市場に比べて異色の存在になっています。

この先どう考えるかは、労働力商品だけは特殊で「需要供給の法則」が当てはまらないと考えて「需要供給の法則」を受容するのか、あるいは労働力商品でも一般商品でも基本原理は同じだということかたちで「需要供給の法則」を棄却するのか、大筋で二つに分かれます。これ以上、この問題に深入りするのはいずれに述べたように今日の主旨ではないの控えますが、私はあれこれ迷うながら、気がつくにつけきょく第2の道を進んでおりました。そうして、ついにはマルクス経済学の価値論の核心はここに潜っていると妄信するようになったのです。そう考えるようになったのは、失業は市場一般の観点からいけば在庫の一種であり、価値形態論をピークにもつ『資本論』冒頭の価値論は、けっきょく、貨幣と在庫（もっとも商品＝在庫のほうは明示的ではありませんが）が実在する市場の理論と解釈することができるのです。そして、この市場像は、商品の価値は生産の要因だけでできまり、需要供給の変動から影響をうけることはない、という「客観価値説」とも独自なかたちで見事に整合したのです。

■マルクス経済学のコア 市場価格は需要供給の変動によって騰落し、価値はその重心として現れるという考え方、価値重心説を否定するのは、かなり勇気がいります。私が若いときから馴染んできた宇野弘蔵の原理論も、たとえば、売れなければ価格を下げ売れば上げるという繰り返しのうちに、商品価値は「尺度される」関係が、『資本論』では冒頭の労働価値説で明確にされていないと批判したり、あるいは、うえで触れたように、資本によって生産できない唯一の商品である労働力の価値の大きさも、景気循環を通じて独自に規定される関係を明らかにすることが「恐慌論の課題」である、といったかたちで価値重心説が重視されています。はじめ漠然としていたことが研究を進めるなかでだんだん明確になってくるというのなら遣り甲斐もあるでしょう。私の場合は、どうも自分の足場が崩れてくる、というわけではないのですが、足下を深掘りしているうちに、やっと自分ひとりがたっている程度のスペースしかなくなってしまった感じです。何とも心細いといえばそうなのですが、槍ヶ岳のてっぺんにたっているようなもので、足場は強固ですし眺望もききます。

こうしてある時期から、宇野弘蔵の原理論との距離をとること、ある意味では自己批判を畏れず敢行すること、こうした方向に進んだのは、ふり返ってみると、ミクロ経済学・マクロ経済学と対峙せざるを得ない環境でおかれていたからだろうと思います。多勢に無勢、所詮勝ち目のない戦とは知りつつも孤軍奮闘するうちに、ミクロ・マクロに還元されないマルクス経済学の基礎理論が、自分なりに自信をもって見通せるようになりました。ただ、断っておきますが、私はこのために宇野弘蔵の原理論を否定したわけではありません。ある意味では宇野の原理論を徹底化したつもりです。沈みかかった船を捨て、安全な船に飛び移るようなことはイデオロギー的に（つまり「好み」の問題として）困難なのです。

新古典派との対峙には、意図しなかったオマケもありました。ハッキリしてきたのは、スラフ派の理論との違いです。これもここで論じる必要はないのですが、新古典派との対峙を強く意識し強固な基盤を築いてきたのは、ピエロ・スラフ派の流れをくむ人たちです。客観価値説という意味では、『資本論』解釈から先に進もうとしない従来のマル

クス経済学よりこれらの人たちのほうが先に行っているのはたしかです。新古典派の人たちからは、マルクスはマイナー・リカーディアン、マルクス経済学の価値論よりスラッファのほうが洗練されている、といった見方をされることが多いのですが、価値重心説を正面から批判することで、スラッファに還元されない固有のマルクス経済学もみえてきました。それは貨幣と在庫が実在する市場の理論です。

■歴史理論としてのマルクス経済学 この市場の無規律性は、客観価値説の土台となる社会的再生産といわば水と油のような関係にあります。後者は、インプットとアウトプットの間に確乎とたる技術的客観性がコアをなしているのです。ごく大雑把に言うと、資本主義経済は、流通と生産という性質の異なるサブ・システムを内包した構成体だということになります。ここからでてくる結論は、資本主義は自己変容するという命題です。

あるいはこの命題は、30歳代のマルクス、エンゲルスが構想した周知の唯物史観を連想させるかもしれません。もっともこうした類似性は、べつに唯物史観に限るわけではなく、一般に連続的な量的変化とは違う、不連続な構造変化、かたち shape が変わるという意味での変容を説明しようとするれば、異なる契機が内部で拮抗する関係を想定することにならざるをえないところがあります。ただ唯物史観の場合ですと、社会構成体の土台をなす生産様式は、連続的に変化する生産力と、一定の生産関係（生産手段の所有関係だと思いますが）との間に矛盾が生じ、それがある限界に達すると新たな生産様式に転換するという点が主題です。封建的生産様式から資本主義的生産様式へ、資本主義的生産様式から次の次元へ（マルクスの場合、これで階級社会は終わるので、次にくるのはもう生産様式はありませんが）という「体制移行」が問題で、一口に資本主義的生産様式といっても、それ自身が異なるタイプが存在するという「自己変容」への関心は希薄です。たしかに『資本論』の場合、「生産力+生産関係=生産様式」という図式は直接みられません、生産力の上昇は資本構成の不断の高度化を生み、その結果、労働者階級の窮乏化、利潤率の傾向的低落が不可避となるとされています。資本主義は内部に矛盾を蓄積し、発展ゆえにやがて限界に突き当たるといふかたちで、唯物史観の枠組はいうかたちで貫いているといえれば貫いているのです。

新古典派ミクロ理論やケインズ経済学に対峙するマルクス経済学を確乎たるものにせんというのは、やはりどこか見が狭すぎます。先鋭にみえても、所詮相手がいないと成りたちません。ただそんな動機でもかく原理論を基礎の基礎から再構築しようと藻掻いているうちに、マルクス経済学の積極的意義も次第にハッキリしてきました。マルクス経済学の課題は、けっきょく資本主義の自己変容を解き明かしその歴史的発展を解明することにある、だから新古典派やネオ・リカーディアンの経済理論と根本的に異なる独自の学問体系が必要なのだ、と胸を張っていえるようになったのです。と同時に、このことは自分がいままで立脚してきた経済学の大系、一般に宇野理論とよばれていますが、これに対する批判的な捉え返しを必要としました。2000年代にはいったころからでしょうか、こちらに関心が広がり、あれこれ考えているうちに、宇野没後、支配的になっていった（ようにみえる）純粋資本主義の再純化、「新純粋資本主義」と自然と対峙するようになりました。これについては『経済学方法論批判』にまとめたのですが、話が長くなるので今日は

割愛します。

## 2 マルクス主義の起源

■「学」より「主義」 さて、前置きがすっかり長くなってしまったのですが、本題の「マルクス主義」には入ります。といっても、この問題を全面的にお話しする準備も時間もありません。ただ「マルクス経済学」と名のつて経済学研究をやっていると、当然のことなのかもしれませんが、おまへは「マルクス主義者」なのか、とか、資本主義を批判して社会主義を支持するのか、とか、この種の質問を繰り返し受けることになります。こういう人たちには、マルクス経済学とマルクス主義の関係など説明しても通用しません。両者の違いをいえばいうほど、問題の核心をはぐらかしている、とか、本音を隠しているとか、疑われるばかり、右にせよ左にせよ、イデオロギーの強い人たちなのでしょう、「学」より「主義」のほうに興味があるようで、新古典派経済学に対峙できる、もう一つの経済理論として、マルクス経済学を確立するなど、大学教師の自己保身の術としか映らないようです。

それで、私もどうせかみ合わぬ話になると諦め、「マルクス主義」について正面から語ることはなかったのですが、それでもたえず「マルクス主義」と「社会主義」の問題は頭から離れることはありませんでした。そもそもマルクス経済学を学び研究しはじめたのは、私の場合とて同じで、マルクスの思想に興味を覚えたためです。大学に職を得るようになってからは、結果的には文字通り「環境が意識を決定する」の伝で、今お話ししたような経緯でもつぱら『資本論』を経済理論の書として読み込むことに専念してきたに過ぎません。大学教師を離れたいま、これまで漠然と考えてきたことを少し話してみたくなった次第です。マルクスの思想について深く考えられてこられた方からみれば、思いつきの戯言に過ぎないかもしれませんが、私なりにずっと考えてきたことです。

とっかかりになる本が二冊あります。ほんとはもっとあれこれあるのですが、今年の三月に研究室を閉じるにあたり、もっている本はあらかじめ処分し、残したものも箱詰めにしたままなので、記憶に残っている二冊を手がかりに話してみます。一冊は A.J.P. テイラー『革命と革命家たち』(古藤晃訳、新評論、1984年)、もう一冊はテリー・イーグルトン『イデオロギーとはなにか』(大橋洋一訳、平凡社、1999年)です。

■政治革命 『革命と革命家たち』はイギリス BBC で放映された番組をベースにしたもので、挿絵写真がたくさんはいつた本です。翻訳がでた年に寝転んで読んだ(眺めた)だけですが、ただ自分のなかでモヤモヤを吹っ切る、よいきっかけになりました。第1章「フランス革命 — 最初の近代革命」は次の一節で締めくくられています。

||A| 一七九四年の夏には、フランスは戦いに勝利をおさめはじめていた。領土全域が解放され、いわゆる自然国境まで回復されていた。一七八九年から九四年までのあいだに、さまざまな理念が乱立し言語さえ統一されていなかったフランスが、単一国家に変貌をとげたのである。

フランスには<sup>ナショナリズム</sup>民族主義がめばえていた。フランスは伝統と歴史をのりこえ、他国のさまざまな要求を断固としてしりぞけることができたのである。ここに、フランスから世界の各地にしだいにひろまってゆく三つの主題が登場したのであった。これらはその後さまざまのかたちでつちかわれてゆくのであるが、ともあれ、民主主義と民族主義、そして社会主義という革命のこの三つの大義はすべて、一七八九年七月十四日のパステューユ陥落に端を発したものであったのだ。(テイラー [1984] 33 頁)

テレビ番組のシナリオということもあるのかもしれませんが、ちょっと断定が強すぎます。最初という意味では、国王の首を民衆の眼前で切り落としたという意味では、フランス革命に先行するイギリスの市民革命（ピューリタン革命）の位置づけが問題でしょうし、最近の経済史がらみでは、シビック概念、共和政をオランダ独立戦争にまでさかのぼることにもなるのですが、この本がでたころは状況はいまとはまた違っています。ただ私にとって重要だったのは、「民主主義」「<sup>ナショナリズム</sup>民族主義」「<sup>ソシアリズム</sup>社会主義」の並置という一点でした。

私には、この一節がどうもしっくりこない、なぜなんだろうかとあれこれ反省するうちに、「フランス革命＝ブルジョア革命、ロシア革命＝社会主義革命」というドグマが自分のなかに深く潜伏しているの気づきました。専制政治を廃し、議会的「民主主義」を通じて、ブルジョアジーが政治権力を掌握するようになったという通念を、おそらく戦後日本の「教育」を通じてでしょう、しっかり刷り込まれており、「民主主義」と「社会主義」の並置がどうやらこれに引っかかるのだとわかったのです。

ブルジョア革命と社会主義革命の分離は、もうだれもこれについて正面切って論じなくなったいまではピンとこないでしょう。かつてこの分離に重きをおいていた人も、いつの間にか、忘れてしまったようで、イデオロギーとはこのようなものです。それはともかく、六〇年代、七〇年代まではまだ、両者を分離するのは常識で、そのうえにたっていわゆる二段階革命論を認めるかどうか、学生どうしても論争になっていました。そして、さかのぼれば、明治維新はブルジョア革命か否かをめぐって、「戦前」（この用語は通じるでしょうか）に「日本資本主義論争」というアカデミズムを二分する大論争があったときいて、私たちの世代は育ってきたわけです。

私の結論は、ブルジョア革命と社会主義革命の分離そのものを棄却すべきだ、というものでした。極端に言えば、フランス革命とロシア革命は同じ種類の革命だという立場です。この本自体は、具体的な出来事の流れを追うことが主題で、こういったシェーマを断言でしているわけではありませんが、だいたいこのようなストーリーで描かれています。ロシア革命をフランス革命の連続線上に位置づけるということは、資本主義はブルジョア革命で、社会主義は社会主義革命で生じるというテーゼを棄却することです。たしかに、資本主義はブルジョア革命ではじまるのか、これについては次に述べるように、もともと再考の余地はありました。しかし、社会主義に関しては「革命」と不可分だと考えられていました。社会主義はなによりも意識的に実現されるべきもので、したがって、だらだらといつの間にか、社会主義になっていたではすまない存在だったのです。社会主義革命から逆算して、資本主義もまたそれに対応する革命があるはずだ、という革命史観が成立するわけです。

初期マルクスの思想については、六〇年代から七〇年代にかけて日本ではブームだったので、詳しくご承知の方が少なくないと思いますが、大きくふり返ってみると大革命のあと、世紀をまたいで一九世紀のフランスで繰り返された革命と反革命のなかで形成されたものにみえてきます。一八四八年の革命はピークだったのかもしれませんが。パリ、ブリュッセルあたりにいたマルクスとエンゲルスは、フランス革命の徹底化を求める潮流と接し、これを遅れたドイツに導入することに奔走していたようにみえます。

とはいえ、フランスではもう王の首は刎ねてしまつたわけで、主題は「民主主義」を「社会主義」として徹底することが移っていたようです。ルイ・ブランの国立作業場とか、ブルードンの人民銀行と労働貨幣をつかつた市場社会主義とか、いろいろな社会改革が提案されています。未だ専制が支配するドイツとはだいぶ事情が異なっており、こうした関心のズレが、マルクスやエンゲルスのうちに、フランス社会主義の主流への対抗意識をもたらした源泉の一つだったのかもしれませんが。二人にとって、社会改革を追求する「社会主義」ではなく、政治革命に焦点とした「共産主義」と自称する必然性があったのです。

『資本論』ばかり読んでいると、一八四九年の『共産党宣言』の革命史観は、どうもシツクリこないのですが、政治革命と社会主義を表裏一体におく立場は、特殊な歴史的状況に由来するものにみえてきました。ここから、ブルジョア革命も社会主義革命も区別なく政治革命の基本は一つであり、社会改革としての社会主義とは次元を異にする、と結論するにいたつたのです。

■本源的蓄積・産業革命・市民革命 『資本論』ばかり偏食してきた私には、ブルジョア革命と資本主義の成立の間には大きなズレがあり、資本主義が革命を通じて社会主義に転じるという主張は特殊な事情を反映したものとみえるのです。この点、もう少し補足しておきます。資本主義の起源をめぐる考え方です。『資本論』を読んでいて気になるのは、この起源について、二重の説明がなされているのではないか、という疑問です。市民革命とはまた別の、経済学的な意味での起源です。資本主義の起源については、『資本論』第一巻の末尾の「いわゆる本源的蓄積」のところで、いわゆる二重の意味で自由なプロレタリアートの形成として解き明かされています。この章を読むと資本主義は、かなり早い時代に始動し、長期のプロセスをへて誕生するすがたで描かれています。

||B| 資本主義的生産の発端は、すでに一四世紀および一五世紀に地中海沿岸のいくつかの都市で散在的にみられるとはいえ、資本主義的時代 kapitalistische Ära が始まるのは、ようやく一六世紀からである。(『資本論』第一巻 Werke 版 S.743)

この章では、資本主義は農民が土地から切り離される過程が克明に描かれてゆくのですが、これは一六世紀にさかのぼります。どうもフランス革命の時代とは距離がありすぎて、『資本論』の本源的蓄積に馴染んだ目にはフランス革命との時代的距離が大きいのです。もちろん、イギリスの市民革命はこれに一世紀あまり先行し、調べればおそらく、ピューリタン革命はプロレタリアートの形成とどこかで結びついているとは思いますが、そう簡単に結びつくとも思えません。

もし、一八世紀末に焦点を合わせるのであれば、『資本論』にでてくるのは「産業革命」



になると思います。資本主義は「産業革命」を通じてはじめて確立されたという立場は、『資本論』の解釈はともかく、広く流布した考え方です。ほんとうの資本主義は機械制大工業をベースとするという立場です。宇野弘蔵の発展段階論について検討したことがあるのですが、資本主義の生成（重商主義段階）・発展（自由主義段階）という図式でも、この段階区分の根底には「産業革命」が考えられているように思います。E.J. ホブズボームの文字通り『市民革命と産業革命 — 二重革命の時代』(1989、岩波書店)というタイトルの本もあります。どこまで意識されているかわかりませんが、もし、ブルジョア革命と資本主義の成立を重ねようとすれば、本源的蓄積ではなく、産業革命を資本主義の起源にもってこなくてはならないのではないのでしょうか。

このことと関連するのですが、『資本論』に描かれた資本主義的生産様式（われわれのいう資本主義経済）は、一八四九年に亡命したイギリスの現実を反映しています。この『資本論』もマルクス自身が刊行できたのは第一巻だけですが、そこには革命史観から、一種の自己崩壊論（資本主義はその生産力を急速に高めてゆくなかで、「産業予備軍」を累積させ、同時に大資本への集中が加速する結果、内的な矛盾が高まりやがて破綻するという考え方）に基調が転じています。もちろん、自己崩壊論といっても、最後は階級対立の激化を通じて打倒されるわけで、そのかぎりでは一八四八年の二月革命 *Révolution de Février* を基礎にした『共産党宣言』をより精密に基礎づけたのだということではできません。これが通説的理解だと思いますが、私には少し腑に落ちないところがあります。

要するに、若いマルクスが二月革命のうねりのなかで構想した『共産党宣言』の世界と、イギリスにわたって成熟してゆく資本主義を観察しながら描いた『資本論』の世界との間には、かなり大きな溝（矛盾ではありません）があるのではないかと、そして、社会主義ないし共産主義のアイデアは、はじめの世界で表面上は覆われているのですが、『資本論』の世界には別のアイデアを可能性として秘めているのではないかと。もちろん、あとのほうが実はほんとうのマルクスだ、などというつもりはありません。マルクスの「深読み」で権威づけをはかるカルチャーはいちばんダメなマルクス主義です。私にみえるのは、二つの世界の溝であり、後者の世界を基礎に新たな社会主義を描けなかったのはマルクスの限界です。あとは『資本論』を批判的に読むことで、自分の考えを自分の責任で語るべきでしょう。それはともかく、この問題は、いまの私にとってはたいへん重要なのですが、ここで正面から論じる時間はありません。今日は、最後にもう一度、この問題にふれるにとどめます。

### 3 マルクス＝レーニン主義

■ 「マルクス主義」という用語 やっと「マルクス主義」にたどりついた感じですが、言うまでもなくマルクス自身が自分の主張を「マルクス主義」Marxism などとよぶはずはありません。これはのちの時代の人たちが言いだしたものです。マルクスの主張を一つの「主義」として系譜化する動きは、おそらくエンゲルスの『空想から科学へ』あたりからはじまるのではないかと思います。この呼称がどのようにはじまり流布したのかは、個人

的には興味があるのですが、問題はこうしたルーツではありません。社会主義と同義のものとして強い影響力を発揮した二〇世紀の「マルクス主義」が問題なのです。そして、それは **||A|** の第三のファクター、ナショナリズムを無視しては考えられません。

ただナショナリズムの問題にはいるまえに、少しだけ「マルクス主義」という用語にコメントしておきます。マルクスが『資本論』の初版を刊行したのは一八六七年ですが、この時期、マルクスは同時にロンドンで国際労働者協会（第一インターナショナル）に深くコミットします。この経緯についてはよく知られていますが、私にとって興味深いのは次の三点です。

一つ目は、『資本論』によれば、もっとも資本主義が発達したイギリスの労働者がもっとも先鋭な階級闘争を展開するはずなのですが、そうはならず、相対的に穏健な組合主義に傾いていったこと。マルクスがこの動きをどう考えたのか、これもちゃんと調べてみたいのですが、イギリスの労働者向けの講演などしたようですが、結果的に『資本論』はイギリスの労働者にはほとんど影響を与えなかったようです。もちろん、マルクスの支持者もいたわけで、たとえばアーツ・アンド・クラフト運動を展開していたウィリアム・モリスがフランス語版の『資本論』をもとに紹介を試みたことなど、最近、大内秀明さんがたかく評価されています。

しかし、組合的運動をベースにしたイングランドの労働運動の指導者たちとの意識のズレは隠せません。とくに、六七年頃の状況では、アイルランド独立をめぐる、移民労働者であるアイルランド労働者とイギリスの労働運動の指導者の間には軋轢があったようです。Kevin Anderson, *Marx at the Margins: On Nationalism, Ethnicity, and Non-Western Societies*, 2010 が平子友長訳ででています。爆弾闘争に進むアイルランダーと、行き過ぎだと反対するイングランドの労働者は、けっきょくイギリスのアイルランド＝植民地支配の是非をめぐる対立に発展するわけです。ここにはナショナリズムが階級闘争に絡んでくるわけです。マルクスは両者の間に挟まれてどっちつかずの感じですが、過激化するアイルランダーの爆弾闘争にはさすがに与し得なかったようです。

二つ目は、『資本論』のドイツへの影響です。ドイツ語で書かれた『資本論』は、ドイツの社会主義の運動に影響を与えたは間違いありません。マルクスも第一にこれを望んでいたのはたしかです。ところが、『資本論』をドイツに導入するにはむずかしい問題が控えています。これもよく知られているように、『資本論』の初版の序文でマルクスは、この書物はイギリスを例解にあげて展開されているが、それはイギリスが資本主義のもっとも進んだ姿を示しており、そして、ここがポイントですが、ドイツの未来の、といっても遠い未来ではなく、直近のすがたを示していると述べています。宇野弘蔵が周知の三段階論を宣伝するときによく参照した一節です。先発国イギリスを基礎とした資本主義の理論が、後発国ドイツの現実にそのまま適用できるのか、これはこの後『資本論』の受容に際して、二〇世紀において繰り返し争点となった問題が芽吹くことになるのです。

三つ目は、ロシアの革命運動家との結びつきです。六〇年代後半にはマルクスの周りにはいろいろな国々からきた亡命者が出入りしており、そのなかにツアーに追われたロシア人が少なくなかったようです。『ザスーリチへの手紙』はよく知られていますが、『資本

論』は、これは言い過ぎからかもしれませんが、イギリス労働者よりも、あるいはドイツよりも、なぜかこうした周縁に強力なインパクトを与えたようにみえます。これはマルクスには、意外のことだったかもしれません。ロシアもアイルランドも、そして、アイルランドの向こうには合衆国が存在するのですが、なぜかマルクスの学説は、西ヨーロッパの周縁から注目されたわけです。

「マルクス主義」というのは、『資本論』が公刊された時期に、イギリスの外部に受容される過程で生まれた呼称だ、これが結論です。そこでは『資本論』にでてこない、革命とナショナリズムの問題がクローズアップされます。一八七一年にはパリ・コンミュン蜂起がおり、これがマルクスの名が流布する契機となると同時に第一インターナショナルが崩壊する契機となるわけです。この詳細はよく知られているとおりですのでいまは省きますが、結論だけいえば、『資本論』に描かれた資本主義像から予想されるのとはかなり異なる色彩の社会主義像が全面に打ちださ、パリ・コンミュンを理念化した政治革命、プロレタリア独裁としての社会主義革命が内装されます。これが「マルクス主義」の生成です。

■ナショナリズム しかし、政治革命を標榜する「マルクス主義」が西ヨーロッパで確立することはありませんでした。フランスではパリコンミュンを最後に革命の波は途絶えます。第一次世界大戦を挟んでドイツでは政治革命の高揚がみられるのですが、ロシア革命はオーストロ・マルキシズムを批判するソビエト・ロシアのマルキシズムを二〇世紀の「マルクス主義」として確立する契機となります。この経緯に私は興味をひかれますが、「二〇世紀のマルクス主義」が消失した現在、大方は昔話の類でしょうから省きます。いずれにせよ、「マルクス主義」と称されているのは、このロシア革命以降のマルクス主義、言い換えれば「マルクス・レーニン主義」です。この特質については、すこし書いてみたことがあります。ポイントはこのマルクス・レーニン主義には、二段階革命論と世界革命論の二つの顔をもっていたという点です。見かけは単純でな顔をしていても、もかなり複雑な性格をしています。詳しくは、以下をご覧ください。

||C| 第一の顔である二段階革命論の背景には収斂説がある。遅れて資本主義化した諸国が、資本主義のレールの上をひた走るイギリスを追走するとすれば、それよりなお遅れた諸国は、まずこの資本主義のレールに乗ることからはじめなくてはならない。このレールに乗る過程は、『資本論』に即していえば「いわゆる資本の原始的蓄積」ということになるが、それにはまた、封建制を打倒する政治革命が不可避とされた。ブルジョア革命としては、イギリスの清教徒革命と名誉革命が先行するが、その典型とされたのは、原始的蓄積が不徹底であったフランスにおける大革命のほうであった。マルクス主義の正統では、ブルジョア革命で権力を握った資本家階級を労働者階級が打倒するプロレタリア革命を通じて、社会主義への移行が達成されるというテーゼが受け容れられていったのである。

しかし、現代の目で捉えかえしてみると、革命はつねにこのフランス革命と同じく、国王や封建領主、あるいは植民地宗主国による専制を打倒し、伝統や権威を破壊し共和制を指向する、広い意味での市民革命であり、その内実は、民主主義・社会主義・民族主義の混交態以上でも以下でもないことがわかる。ロシア革命はパリコンミュンのコピーであり、それはさまざまな植民地解放闘争に援用され、またフィリピンのマルコス打倒から「アラブの春」に至る民主化革命として陸続としている。自由と平等を求める政治革命が近代の社会主義的

主張を育てていった歴史の流れのなかで、社会主義と革命を表裏と捉える「社会主義革命」という考え方が自然にみえたのはたしかだが、革命で誕生した社会主義が瓦解した現在からあらためて振りかえると、資本主義から次の社会への移行に政治革命が不可欠となる理由は見いだしがたい。ただ二〇世紀の歴史的経緯のなかで、マルクス＝レーニン主義は、収斂説的な資本主義像に立脚し、単一のルール上で資本主義から社会主義へ移行するとみる二段階革命論として普及し、日本でもこのテーゼを前提とした「日本資本主義論争」を通じて受容されたのである。

マルクス＝レーニン主義にはもう一つの顔がある。レーニンは「帝国主義戦争を内乱に」というテーゼを掲げた。この「革命的祖国敗北主義」にいう祖国は、もちろん戦争を遂行する帝国主義本国であり、さらにその内乱が革命にまで発展したのは、資本主義経済が未熟な帝政ロシアでのみだった。これに対して、この帝国主義戦争が現実にもみだした歴史的事態は、植民地・従属地域での独立解放をめざす運動の高揚であった。第一次世界大戦後の世界では、民族自決型の運動が帝国主義列強の周辺に急速に広まっていったのである。資本主義がその外部に滲透し既存の社会関係を分解する作用をもつ以上、この周辺部分でこれに対抗する運動は、必然的に中心部分の運動と結びつかざるをえない。この連動面を重視する第二の顔を世界革命論とよんでもよいが、ただこの呼称は手垢に紛れている。このもう一つの顔も、ロシア革命直後の社会主義建設をめぐる歴史的論争から距離をおき、現在の視点からあらためて眺めてみる必要がある。

たしかに、一般論としては、本国の階級闘争と植民地の民族解放闘争の連帯は不可欠であろう。だが、各ネーションの自決と平等を前提としたインター・ナショナルは理念であり、ソーシャリズムは特定のナショナリズムと結合することで、現実の社会的勢力となりえた。この結合は、帝国主義本国の内部では深刻な葛藤を生んでいったのに対して、周辺部では逆に補強しあう関係にあった。「革命的祖国敗北主義」が排外主義を克服する困難に比し、「反帝愛国」が洋行買弁を非難するのははるかに容易だった。資本主義の中心より周辺部で、革命への圧力は高まる構造が存在していたのである。

そして『資本論』が一九世紀末の新たな状況のもとで読み替えられていったように、レーニンの『帝国主義論』もまた、第二次世界大戦後の冷戦構造の文脈に沿って読み替えられていった。世界革命論は、周辺部の革命が中心部分の革命の導火線になるといった「帝国主義のもっとも弱い環」説にはじまり、都市が農村を包囲するといった周辺革命論へと変質し、マルクス＝レーニン＝毛沢東主義となって第三世界に広く普及していった。帝国主義の支配・抑圧が周辺部分で顕在化する以上、直接にはまったく資本主義を経験していない地域でも — 南米のジャングルのなかでもヒマラヤの麓でも — 世界史の観点からみれば、最高の発展段階にある資本主義＝帝国主義を体験しているのであり、すべての反帝国主義運動は、社会主義革命の一環として位置づけられることになる。こうして、二〇世紀のマルクス主義は、『資本論』の内容とはほど遠い諸国・地域において社会主義諸国を族生させ、第二次大戦後の冷戦構造のもとで、それらはソ連邦の利害に沿って組織化され、資本主義に対する社会主義陣営を構成していったのである。(小幡道昭「宇野理論とマルクス」(鶴田満彦・長島誠一編『マルクス経済学と現代資本主義』所収) [2015])

まだまだ考えてみなくてはならない歴史的問題は残りますが、マルクス＝レーニン主義のポイントは、私は第三世界にあると思います。資本主義の本体と非資本主義の世界の間に埋めがたい溝が存在し、そこに政治的な支配・従属の軋轢が不可避であったこと、そして思い込みかもしれませんが、マルクス主義はその軸足は第三世界のサイドに移すことで

イデオロギーとしてのパワーを発揮したこと、そのためにソーシャリズムはナショナリズムとの結合を強めてゆかざるをえなかったこと、これが私の考える二〇世紀のマルクス主義の実体です。

■グローバリズム 二〇世紀のマルクス主義は、その歴史的役割を終えた、これが次の結論です。これも話すとき長くなりますが、要点のみいえば、第三世界のなかから、新たに新興資本主義国が台頭・発展するようになったというのが基本です。一九九〇年代からグローバリズムというバズワードが巷間流布し、これをめぐって諸説相入り乱れるようになったのですが、この用語はともかく、この時期、あるいはもう少しひろくとれば、ともかく、二〇世紀末から二一世紀にかけて、大きな地殻変動が起きたことはたしかだと考え、これにグローバリズというラベルを貼ってみることにしました。問題はこの地殻変動を引き起こした原因で、グローバリズの底流をなすのは新たな資本主義国の勃興だといったのです。

しかし、多くの人々はこれは先進資本主義国が新自由主義に変化し、新自由主義＝アメリカナイゼーションととって、その余波で中国もインドも資本主義的に発展した、と考えたようです。どちらが主因か、決着はつきませんが、多数決でいえば、アメリカ中心主義説でしょう。宇野理論を支持する人々も、あらかたはこの説で、パックス・アメリカナにこだわっています。私はこの種の覇権論で資本主義の歴史を捉えるのでは、宇野理論の限界を脱してえないと考えています。

ちょっと横道に逸れますが、ご承知のように宇野段階論の祖型は、第一次世界大戦を終着点として、イギリス資本主義を基本におき、その生成・発展・没落というスリーステップで資本主義の長期の歴史を枠づけたのですが、この枠組で二〇世紀の資本主義を捉えることには無理があります。最大の問題は、戦後の冷戦期を支えた合衆国の中心性がぜんぜん捉えられない点です。このため、実証分析をやってきた研究者から、宇野段階論の見直しが試みられ、ラフに言えば、宇野の段階論を一つの山として、もう一つ合衆国を中心とした世界経済の興隆をもう一つの山とする案が提案されるようになったのではないかと思います。私も見直しに吝かではないのですが、でも、このパックス・ブリタニカ、パックス・アメリカナはどこか宇野学派の優等生的模範解答みたいなどころがあり、なかなか与し得なかったのです。

話はちょっとこじれますが、問題はこうです。まず第一に、宇野の段階論の基本的性格です。そのコアはもちろん帝国主義段階の規定にあります。二〇世紀を支配したマルクス＝レーニン主義の観点からみるとそれはどういう意味をもつのか。帝国主義段階は、植民地支配を生み、そのあとの時代においても、南北問題となるような資本主義を阻む要因を抱えた、広い意味で資本主義の没落期であったと思います。修正段階論は、この問題に答えていないのです。その原因は、資本主義の本体しか、視野においていないからです。西ヨーロッパから合衆国に拡大したところだけをとりだしてみると、一国主義的ではありませんが、相変わらず第三世界は蚊帳の外なのです。資本主義の時代区分だけの問題ならそれでいいともいますが、同時に「没落期」という規定は関心外となっているのです。

宇野の三段階論における「没落期」という規定は、第三世界のなかからもう資本主義が

生成・発展することはない、ということを暗に含意しているのです。だから没落期なのです。新しい資本主義が誕生する没落期というのは語義矛盾でしょう。宇野段階論は、二〇世紀のマルクス＝レーニン主義を、独自のかたちで補完するものにみえてきました。

グローバリズムの底流をなすのが新たな資本主義の台頭は、マルクス＝レーニン主義に最後通牒をつきつけるものでした。第三世界の諸国・諸地域が経済的発展を望んでも、もはや資本主義という道は封じられている、社会主義として独自の発展するほかない、というテーゼが事実によって否定されます。もちろん、すべての第三世界で一様に資本主義化が達成されるわけではありません。新興諸国の台頭は一部に限られ、そうした諸国は残された第三世界との間に溝をつくり軋轢を生みます。こうした支配隷属関係に対抗する革命運動はこれからも続くでしょう。しかし、二〇世紀のマルクス＝レーニン主義は、かつてのようにここでの革命運動を主導する力は失いました。「マルクス＝レーニン主義」を国是に残す中国の覇権に対抗できるのは、イスラムのインターナショナリズムなのかもしれません。

いずれにせよ、こうした大きな地殻変動が起こっているときに、なお、資本主義の本体比較で、宇野段階論の再版をはかるのでは問題の本質がみえないのではないかと、というのが私の結論です。段階論の枠組そのものを批判対象にすえ、資本主義でない諸国・諸地域が資本主義という本流に流入し、新しい「プレート」を形成する局面を考えた資本主義の段階論が必要なのです。生成・発展・没落だけではなく、それに先行する資本主義の「起源」に焦点を当てた「多重起源説」の段階論です。

## 4 マルクス主義の行方

■教条主義回避 マルクス＝レーニン主義は歴史的役割を終えた、と宣言してしまった以上、マルクス主義の行方など、いまさら語っても意味ないでしょう、もし、マルクス主義＝マルクス＝レーニン主義ならば。私はこの二〇世紀のマルクス主義が誤りだとか、限界があったとか、評価するつもりはありません。それは、生まれるべくして生まれ、資本主義の歴史的発展のなかで決定的な役割を果たしたことに間違いありません。

マルクス経済学を研究しているというのと、マルクス主義を支持しているのか、とこればかりたずねてくるような人は、歴史的役割などいっても逃げ口上としか、受けとってくれません。主義というものに、歴史的状況に左右されない普遍性を期待し、また自分は不変の信条をまもっている、つもりなのでしょう。私はこの意味では相対主義者で、マルクスの唯物史観を少し歪めたかたちになるのかもしれませんが、状況が意識を決定するのであれば、二〇世紀の状況が生んだマルクス主義は、状況が変わればその役割を終えると考えてよいという立場です。けっきょくこれが、また最後でふれますが、イデオロギーの問題なのです。

ここで「マルクス主義」の行方という場合の、「マルクス主義」は「マルクス＝レーニン主義」とは異なるマルクス主義があるとすれば、という話になります。混乱を招くなら、「マルクス主義」という用語は避けてもかまいません。「マルクス＝レーニン主義」は実は

紛い物の「マルクス主義」で、マルクスの著作を丹念に読めば、本物の「マルクス主義」が実はあるのがわかる、これがそれだ、というのは、最悪の権威主義です。マルクス＝レーニン主義は時代に即した立派なマルクス主義であり、レーニンがマルクスをねじ曲げたわけでも何でもありません。なかなか話が進みませんが、この点だけは強調しておきます。

■成熟した資本主義 mature capitalism 一世紀半前のマルクスの思想をいま批判的に読みなおしてみると、現代に即してどのような展望が開けるのか、この展望のようなものを「マルクス主義の行方」として考えてみることにします。「マルクス主義の起源」をふり返ってみると、そこに大きな屈折点があったのに気づくと思います。たとえば、オーストロ・マルキシズムがロシア・マルキシズムに解体吸収された局面です。オーストロ・マルキシズムあるいはもう少し広くいえば、修正主義論争なども含めて眺めてみると、階級闘争・政治革命へ転換するまえのマルクス受容の特徴が浮かびあがってきます。

ロシア革命は資本主義が十分に発達しきったすえに発生したのだというのは、レーニンにだって無理でした。「帝国主義のいちばん弱い環」だから、まずロシアで社会主義革命が発生したという位置づけになっています。いまの時点から充分距離をとってみると、ロシア革命に至る過程で後退していったのは、次のテーゼではないかと思います。「社会主義は資本主義がいちばん発展した諸国で発生する」というテーゼです。『資本論』の中心をなすこのテーゼは、『資本論』第一巻が刊行される時期に、第一インターナショナルとパリコミューンの影響をうけ、マルクス自身によって周縁での政治革命の流れに切り替えられていったようにみえます。

いずれにせよ、ある意味ではオーソドックスな立場、つまり、資本主義は充分歴史的に発展すれば、その内部に次の社会へ移行する基礎を生みだす、したがって、もっとも進んだ資本主義から社会主義の社会はこぼれ落ちる、という立場は、二〇世紀のマルクス主義では陰に隠れてきました。なにがしたいのかはもう察しがつくと思います。帝国主義段階という二〇世紀の大きなプレートは、新たな資本主義諸国の台頭という大きなグローバルイズムの底流によって新しいプレートに更新されてゆくなかで、旧先進資本主義諸国の内部では資本主義の成熟が進んでいる、新興諸国の成長と競い合流するかたちで資本主義の道を進むのか、資本主義とは異なる道を社会を模索するのか、これが先進資本主義国内部に鋭いイデオロギー的対立を生みだすとはずです。

■純粋資本主義批判アゲイン このような観点から鳥瞰してみると、これまでのマルクス経済学を基礎の基礎から再検討してみる必要がでてきます。二〇世紀末の地殻変動を目撃するなかで、マルクス経済学はどう舵を切ったらよいか、これは、『資本論』にもどるとか、宇野弘蔵の三段階論を改定するとか、といったレベルではすみません。ただこれはちょっと問題が大きすぎて、さすがに一言で結論を、というわけにはまいりません。ここでは、私がおのなかで育ってきた宇野弘蔵の方法論に対する内省というかたちで、その方向性を探してみたいと思います。

宇野の方法論については、ある程度ご承知かと存じますし、何度も書いてきたことなので（小幡『マルクス経済学方法論批判』2012年）詳しくは繰り返しません、私の解釈

では、その最大の特徴は帝国主義段階をハイライトした段階論の分離であり、そのための純粋資本主義ベースの原理論の構築、ということになります。こっちなら、一言でいえます。この方法論が、教条的なマルクス＝レーニン主義の正統派マルクス経済学を批判しながら、大きな枠組で捉え返せば、帝国主義段階＝没落論というマルクス＝レーニン主義のテーゼをより徹底するものであったことはすでに述べたとおりです。

問題は、帝国主義段階を通じて植民地あるは「低開発の開発」として抑制されてきた地域における、新たな資本主義の台頭、すなわちインペリアルイズムからグローバリズムへという二〇世紀末のプレート転換です。この転換に直面しても、宇野の方法論の普遍性を疑わない人たちも少なくありません。とくに原理論に対してはそうです。「もし資本主義が変わったと思うのなら、段階論を変えればよい、原理論まで変えたのでは、資本主義がどんなに変わっても変わらない本質を解明する原理論が泣く、原理論と段階論を分離した意味がわかっていないんだ...」というわけです。私がプレートの交替を目撃し、これまで述べてきたような理由で、段階論（ただの時代区分をこえた段階論の構造）を変えるには、原理論の再構築が不可避だと公言したとき、これはもう宇野教条主義といたくなるような人々から激しい反発を受けました。

宇野が本当はどう考えていたのか、それに対して私の理解が浅いのか、それはわかりませんが、私にとってともかく解決したい問題がそこにはあったのです。これも一言でいうと、原理論の直接適用をめぐる問題です。断っておきますが、これは問題のすべてでも、中心でもありません。ただ、ここからアプローチすると見通しがよいというだけです。純粋資本主義の方法は、一九世紀末以降の資本主義の発展を商品経済的な要因に対して、独占や国家といった非商品経済的な要因が果たす役割が強まってゆく、いわゆる純化傾向の逆転、不純化という枠組で捉えて、この対蹠点に商品経済的な要因だけで自律的に作動する純粋資本主義を理論的に構築するというものでした。

「マルクスは、この純粋資本主義にもっとも近い一九世紀のイギリスを例解にとった。しかし、それでも商品経済的要因だけでは説明できない現実を、たとえば窮乏化法則のようなかたちで反映させてしまっている」、宇野は、このように純粋資本主義論は『資本論』を批判し『経済原論』に再純化したのです。また原理論内部の話になりそうなので、細かい点は端折りますが、要するに、こうして純粋資本主義論は、原理論を直接現実の現象に「適用」することを禁忌とする傾向を帯びたのです。自由主義段階でもそうですから、帝国主義段階についていえば尚更のこと、原理論が現実の現象にいかにか当てはまらないか、現実からズレているか、現状分析に役にたたないか（最後のは言い過ぎです、どこが間違っているか、考えてください）、ともかく現実への適用から離れて、もっぱら演繹的推論を極めることに鎬を削るようになります。

極端に揺り戻しは付きもの、当然、原理論の直接適用の流れがでてくるのですが、これがまた、バタな直接適用となると、「歴史を理論的に解明する」というお題目で、歴史的な発展過程をそのまま理論に映し込み、演繹的推論が行き詰ると歴史的事実によって理論内部の体系的移行をはかることになります。この世界資本主義論と新純粋資本主義論、この対立をみながら、私は原論研究をスタートさせた気がします。



理論の研究者として、そして時代的要因もあり、その他もろもろでもかく私は、世界資本主義論からは距離をとっていました。しかし、演繹的推論に徹すれば徹するほど、論理的に説明できない箇所がでてきます。一枚岩の理論体系にみえながら、よくみると要所要所で条件を追加し、論理展開の水準を変化させているのです。はじめにアリストテレスのテコのように、労働力商品化という条件を設定し、あとはアダム・スミスばりの経済人の行動で演繹的に説明できるところまで説明する、というには程遠い状態です。

私が最終的にたどりついたのは、推論の出発点になる内的条件（前提条件）を明示したうえで、その水準で推論を徹底してゆき説明できない箇所を「開口部」として明示するという方法でした。原理論にはこうした開口部がいくつか隠れています。それを探ることが原理論の重要な課題なのではないか、と考えるようになったのです。この開口部に外的条件が作用することで、資本主義は異なるかたち「変容」する、ただこれは理論的に説明できるのは、AかBか、異なる方向に分岐する可能性まで、AからBに「発展」したという事実まで説明できるわけではありません。歴史的発展は、外的条件が積み重なることで、不可逆的な再現性のない現象となるのであり、それは「段階論」として構成してゆくべきだ、これが私の結論でした。

冷やかして「そんな理論ができるなら、一度みてみたいものだ」とか「開口部って、いくつあるのですか」とか、尋ねる人も多いのですが、そういうときは、とりあえず私の『経済原論』をご覧ください、索引で「開口部」を引いてください、と逃げています。実は私も内容が完成しているとは更々思っていない。これから解決すべき問題集を抱えて解きあぐんでいる段階です。ただ、二〇世紀末の地殻変動を理解しようとする、ここまでさかのぼって考えなくてはならないのだ、と確信するようになっただけです。

■原理論と資本主義の熟成 自己宣伝になってしまいましたが、直接適用に話を戻します。原理論は現実の現象に直接適用することはできない、というのは、ある意味でそのとおりです。それはいわゆる現実のモデルではありません。かたちを変える対象を説明するためのメタモデルです。特定の時代、特定の国を限定して、それにフィットするようにつくったモデルではありません。例えば、純粋資本主義に近いとされる一九世紀のイギリス資本主義、この自由主義段階の資本主義に、二〇世紀末の新自由主義の台頭で「逆流」している、だから、再び原理論が有効性を増しているのだ、といった考え方は、けっきょく、現実に近いかズレているかで、理論の有効性を評価する立場だろうと思います。これでは永久に、資本主義の変容にも発展にも手が届かないでしょう。

変容論的なアプローチは、一九世紀のイギリスの歴史的純化傾向をさらに演繹的に再純化した理論だ、一九世紀の現実ともズレているのだから、不純化が進んだそれ以降の資本主義とズレるのは当然、純粋資本主義は、このズレをはかる物差しだ、といったいわば「小原理論主義」に対蹠するものでした。では、現実に適用するとすれば、どういう意味でなのか。私はいままで、先に述べた原理的「変容」を基礎に段階論的「発展」を説明するのだ、と答えてきました。やはり、変容論的アプローチは、段階論の構成に積極的に用いてゆくという意味で「小原理論主義」と異なりますが、それでも「段階論」を媒介にするという意味ではやはり間接適用説です。これが誤りだとは思いませんが、最近、少し見

なおしていることがあります。

やっと資本主義の熟成に話がつながってきました。資本主義が多重的な起源から異なる時点で異なる諸国・地域が流れ込む本流だとすれば、逆に成熟した資本主義諸国・地域は多重的に離脱するかたちが考えられます。今日の先進資本主義諸国のうちには、熟成から離脱への道を考えざるをえない局面に直面しているようにみえます。ここで具体的に立ちいることはしませんが、労働のあり方をめぐっても、またその背後に控えている、育児や教育、医療や介護福祉、技術開発や技能形成、エンターテインメントやスポーツなど、広範な領域に、営利企業の原理が浸透して、強いフリクションを生んでいます。貨幣と金融に関しても、商品売買を基礎とする市場をこえた富資産を累積させてゆく市場へ変貌を遂げ、その制御可能性が絶えず問われる段階に達しています。

変容論的アプローチで再構築した原理論の観点にたつと、こうしたフリクションや制御可能性の問題は、商品経済的な原理をベースとする資本主義が抱えるいくつかの開口部に集中するようにみえます。市場原理が強く作用し、外的条件としての既存の制度や慣習文化を解体してゆく作用、逆にこれを押し戻し、市場の原理で処理すべきでない領域を確保しようとする動きが拮抗する状況にあるといつてよいでしょう。ここから先はこれからの研究課題になりますが、新たな資本主義をのせたプレートが隆起する一方で、二〇世紀の資本主義諸国をのせたプレート上で資本主義の熟成から離脱への道が浮上している過程を分析しようとする、変容論的アプローチによる原理論は、むしろある意味で現実に直接適用すべきものにみえてきます。逆にまた、こうした成熟した資本主義の現象を対象にして、資本主義の開口部の理論を再構築してみる必要があると、ややオーバースペックになるかもしれませんがいま考えているところです。

■イデオロギー問題 最後にイデオロギーの問題にふれておきます。資本主義が熟成するなかで、周縁からではなく中心部から資本主義をこえようとするさまざまなオルタナティブの運動が簇生します。資本主義が市場の自己調整原理で完結するものではなく、いくつかの開口部を外的条件で埋めるかたちではじめてワークするものである以上、開口部をどう埋めるかをめぐってコンフリクトが生じることとなります。ここで考えなくてはならないのは、こうした外的諸条件をめぐるオルタナティブは、個別の経済政策としてバラバラに主張されるものではないという点です。こうしたオルタナティブを統合する一定の社会的価値観、イデオロギーに基づいて主張されることとなります。経済政策は単に効率の優劣で比較されるのではなく、特定の「主義」にもとづき価値判断を伴うこととなります。

こうしたオルタナティブをまとめる主義として、「マルクス主義」に可能性はあるのか。私はこの可能性をないと思います。『資本論』の内部崩壊論も、マルクス＝レーニン主義の政治革命論も、資本主義の熟成から離脱を探るオルタナティブを統合するようなイデオロギーを含むものではありません。この意味での積極的イデオロギーは、マルクスとエンゲルスが槍玉にあげた「社会主義」になるでしょう。

ただ問題はかなり複雑です。『資本論』は経済学の書であると同時に、イデオロギーに対する深い洞察を含んでいます。とりわけ、市場自身が誘発するイデオロギーです。一言

でいえば、市場の自己調整作用をコアとするイデオロギー、経済的自由主義です。資本主義は開口部に装着される外的条件に対して、このイデオロギーで変形圧力をかけることとなります。

たとえば労働市場に対して、規制を排し自由な競争を導入すれば、雇用の流動化が進み、賃金の不公正も正される、という主張されるわけです。しかし、非正規雇用の拡大自体は、市場の原理で自然に実現するわけではありません。強力なイデオロギーで市場の外部から既存の法制と慣行を打破することが不可避なのです。ただいったん競争的な環境が用意されれば、その労働市場に直接干渉することはしない。開口部の外枠を整えるのに、自由主義のイデオロギーと強制<sup>デパルト</sup>がつねに作用しているのです。

『資本論』は市場に隠されたイデオロギー誘発力を考える手がかりになります。明解に説明できるほどわかってはいないのですが、資本主義の熟成から離脱を考えると、新たな外的諸条件のセットを統合するイデオロギーとして「社会主義」を掲げるとしても、それは市場自身の誘発するイデオロギーの性格を充分弁える必要があります。「社会主義」は特定の価値観に基づくイデオロギーだが、市場は特定のイデオロギーからはフリーだ、という外観をつねにまもって現れます。相手はイデオロギーであるが、自らは不偏不党だという外観をつくりだすところに、もっとも強力なイデオロギーの作用がある、ということ、イーグルトンは『イデオロギーとはなにか』で解き明かしていたと思います。もし「マルクス主義」の行方ということ考えるとすれば、それは単なるオルタナティブの統合イデオロギーの中味ではなく、開口部に作用する市場の強力なイデオロギー作用へ批判原理ではないかと考えるのです。